

## 漆ろうの製ろう方法の確立



図1 漆の実



図2 ジュースミキサーでの実の粉碎



図3 市販の圧搾器



図4 ろう粉の入った袋を煮る



図5 冷えて固まったろう粉の入った袋を煮て圧搾器で搾る



図6 応募企業が試作した絵ろうそく

表1 ろうの抽出量

ろう粉(g)	6,720
抽出したろう(g)	2,455
採取量(%)	36

採取量(%) =  $\frac{\text{抽出したろう(g)}}{\text{ろう粉(g)}} \times 100$

現代の製造現場に合った漆ろうの製造方法を確立するため、伝統的な圧搾法による製ろう技術等を調べ、応募企業の希望にそって道具、品質、採取量に関する3つの目標を設定し、必要な道具及び工程を確立しました。その結果、要望に適した方法で絵ろうそくを試作できました。

会津地方では、古くは室町時代より漆の実（図1）から搾ったろうを原料に、絵ろうそくを生産しており、江戸時代には、最高級品として献上品などに用いられました。しかし明治期には、漆ろうより多くのろうが採取できるハゼノキのはぜろうに代わり、さらには輸入されたパラフィンワックスの普及に伴って、漆ろうは製造されなくなりました。

近年になり、会津地方で漆樹液の採取のためにウルシの木の植栽活動が行われるようになり、応募企業より、採取したウルシの実を活用し漆ろうそくを製造したいと相談がありましたが、現存する製ろう技術は伝統的な工法のままで、企業が希望する現代の製造現場に合った工法ではありませんでした。

そこで、会津の漆ろうそくの復活及び製品化のため、伝統的な工法などを参考に必要な道具を選定し、現代にあった製ろう工法と工程を検討しました。

応募企業の要望の一つ目、半畳程度の広さでなおかつ一人でろう搾りが行える道具の選定と工法については、ウルシの実の粉碎にジュースミキサー（図2）、ろう搾りには市販の圧搾器（図3）を使用することで実現しました。二つ目の要望、不純物の少ないろうの抽出については、粉碎後にふるったろう粉を木綿の袋に入れて煮て（図4）市販の圧搾器で搾り、冷えたろうは水に浮いて固まり（図5）、その他多くの不純物は水に沈殿する方法により分離しました。三つ目の要望、採取量を30～40%とすることについては、ろうを煮ることで、複数回搾ることが可能になり、希望する採取量（表1）を得ることができました。この方法で製ろうした漆ろうで、応募企業が絵ろうそくを試作（図6）しました。

会津若松技術支援センター 産業工芸科  
志鎌一江 出羽重遠

事業課題名「漆ろうそくの復活と製品化」

<用語解説>

**漆の実**：ウルシ科ウルシ属の落葉高木のウルシの木になる種子です。この種子はろう分を含んでいます。

**ろう**：本研究で言うろうは、木ろう（もくろう）、生ろう（きろう）を指し、ウルシやハゼノキの種子から搾ったろうを言います。

**絵ろうそく**：会津地方では、ろうそくに季節の花々を描いた絵ろうそくを生産しています。江戸時代では、最高級品のろうそくとして、献上品、仏事や婚礼などの冠婚葬祭に用いられました。

**製ろう**：木ろうは、日本では主に圧搾法でろう搾りが行われていました。蒸したろう粉に、物理的に強い圧力をかけて搾ります。圧搾法以外にも、溶剤による抽出法などがあり、現代ではこの方法が油やろうを抽出する製造現場での主流です。